

面影の君

「へえ、本当に上手いもんですね。あつという間に達磨になった」

開け放ったままにしていた障子の先から、不意に賛辞の音がかけられる。姿勢良く机に向かっていた信行が、声の聞こえてきた方向へ顔を向けると、そこに誰の姿も無く。しかし信行はさして驚きもせず、ゆつくりと筆を置くと、少しばかり身体を傾けて声が聞こえてきた方へ向き直った。信行の動きを予見していたのか、声の主は音も無く姿を現し、障子の先にある縁側に座り込む。

「何時から見ていたんだ、時雨。この間頼まれた禅画なら、もう暫く時間がかかると烈火に伝えていたはずだが。少しばかり、絵の依頼が立て込んでいるからな」

書きあがった達磨の絵を手にとった信行は、出来を確認するように絵を掲げて紙面を見つめる。信行が住まう小さな屋敷に、屋敷の主に断りなどいれずに忍びが入り込むことは珍しいことではない。……まあ、主従関係もない忍びが勝手

に元武士の屋敷に入り込むことなど、世間一般から見れば相当珍しいことではあったのだが。

「はい。聞き及んでおりますが、今日は別件で。……信行様。農民くんだりの為に絵をお描きになっても、あまり稼ぎにはならないかと存じますが」

「まあ、な。金があるに越したことはないが……」

そこで言葉を切ると、信行は絵を机に置き、達磨の絵に言葉を書き足した。「直指人心 見性成佛」と書かれた文字を見つめる信行の目は、とても静かだ。かつて、時雨が仕えていたころには、ただの一度も見ることが無いような柔らかい光を湛えている。時雨はそんな元の主の姿を見ても、表情何一つ変えない。だが、本人も気付かぬほどほんの僅かに表情を緩めると、時雨は信行に話しかけた。

「実は、先だつての依頼のほかに、もう一件依頼を受けまして。是非、信行様にお受けいただければと思います、参上した次第です」

「今、立て込んでいるという話をしたばかりかと

思ったんだが」

時雨の話を聞いた信行は、呆れ顔で肩を竦めた。しかし、時雨は至って真面目な顔のまま、話の続きを口にする。

「勿論、聞いておりました。しかし……町人や農民に売る、と言ったような話ではないのです。とある古寺が観音菩薩の絵を所望しております」
「……僕の絵を、寺に奉納するということか？ 由緒ある寺なら、相応の絵師に描いてもらえばいいだろう。何も、僕の手でなくとも」

「それが、信行様が書かれた禅画を見た和尚からのたつての依頼なのです。実は、その寺、此度の戦で焼け、ご本尊の菩薩様も消失したそう。信行様がお描きになられた菩薩の面差しが、ご本尊によく似ていたそうです」

「そうか……」

時雨の話を聞いて、思わず信行の言葉が詰まる。和尚が見たという菩薩は、信行が手習いがてら走り書きしたものはずだ。それを勝手に時雨と烈火が持ち出して、時折絵を買いそうな人間に見せては信行の為に仕事を取ってきていたのだ。

しかし、まさかこんな大事な話を持つてくるとは、流石に信行も気が重い。

「信行様、これは良い機会だと思っんです。ここに住まわれていたら、なかなか寺に参ることも難しい」

「ああ、そうだな……」

兄の首に手を掛ける。そんな大罪を犯したにもかかわらず、その兄である信長は最大の慈悲をもつて、信行に新たな人生を与えてくれた。正し、幽閉されているに違いはなく、信行自身もこれ以上信長に迷惑をかけるつもりは微塵も無かつた。故に、誤解されるような行動は一切慎み、信行はこの小さな屋敷の中に籠もっている。そんな身の上では父親の墓前に花を手向けることさえままならない。時雨は、言外にその代わりに絵を寺に収めてはと信行に勧めているのだ。信行は、ふっ、と息をもらすと小さく頷いた。

「分かった。その仕事、承ったと和尚に伝えてくれ」

「は、畏まりました」